

タイムマシンとしての時計

吉岡洋（京都大学）

「タイムマシン」は、H. G. ウェルズによる同名の小説（1895年）をきっかけに、一世紀以上私たちの物語的想像力を絶えず刺激し続けてきた。タイムマシンは従来サイエンス・フィクションの定番であったが、今日では狭義のSFに限らず、小説、映画、漫画、アニメーションなどきわめて広い範囲に及ぶ物語ジャンルにおいて、日常的に参照される文化表象となっている。

かつては現実の人生や歴史の不可逆的な時間に対して、あり得たかもしれない現在を提示したり、また過去を変えることから生じる「タイム・パラドックス」が問題化されたが、現代ではむしろ複数の「並行世界」（パラレル・ワールド）を当前のごとく許容する物語が増えている。その意味では、私たちは古典的な「タイムマシン」が代表する時代の終わりを生きているのかもしれない。

本シンポジウムではこの「タイムマシン」という主題を、美学的・メディア論的に読み解く可能性について検討したい。

まず、メディアアートの分野で「タイムマシン」という主題に注目し、デジタル技術を利用してそれを作品化してきたアーティストの赤松正行氏をゲストにお迎えし、その作品の体験を共有するとともに、制作の動機や背景についてお話をうかがいたいと考える。

次に「時間とメディア」という視点に立って、岩城覚久氏から包括的な問題提起をさせていただく予定である。私たちが時間を表象する形式が、いかに深くメディアによって規定されているかを確認し、その認識に基づいて「タイムマシン」という問題をどのように設定できるのかが論じられることと期待する。

また、「メディア考古学」という分野のパイオニアであるカリフォルニア大学ロサンゼルス校のメディア学者エルキ・フータモ氏にビデオで登場していただき、「タイムマシン」をメディア考古学的立場から考察していただく。フータモ氏は最近、*Illusions in Motion: Media Archaeology of the Moving Panorama and Related Spectacles* (Leonardo Book Series)と題する浩瀚なメディア史の書物を上梓されたばかりである。

メディアの中でも「写真」はとりわけ、過去をあたかも現在のように経験させる装置として、私たちの知覚経験の変容にきわめて決定的な影響を及ぼしたことは言を俟たない。いわば「タイムマシン」的想像力は写真の経験なしには不可能であり、そうした事をふまえて前川修氏に問題提起をさせていただく。

最後に吉岡洋が、「タイムマシン」という表象の背後にある時間意識、時間理解の本質を考えるために、それが「時計」による時間の計測というありふれた日常的行為と、いかに密接に結びついているのかを考察したい。

以上のような問題提起をもとに、タイムマシンの美学とはいかなるものでありうるかを討議したい。